COLUMN

静脈資源の海外流出



慶應義塾大学経済学部教授
細　田　衛　士
HOSODA Eiji

1977年慶應義塾大学経済学部卒業、1980年同学部助手、1987年助教授、1994年教授、2001年7月より2005年9月まで同経済学部長、現在に至る。学外の役職としては、2010年4月～ 2012年4月環境経済・政策学会会長、現在、環境科学会会長、中央環境審議会委員、3R推進協議会会長など。専攻は環境経済学、特に資源循環の経済学をライフワークとする。

静脈経済で取引されるもののうち潜在資源価値を持つものを、筆者は静脈資源と呼んでいる。多くの使用済み製品・部品・素材がこれに該当する。しかし静脈資源の資源価値はあくまでも「潜在的」なものであり、必ずしも価値が市場で顕在化して、再生資源（2次資源）として実際に循環利用されるわけではない。良質の鉄・非鉄スクラップのように市場取引によって価値が顕在化し、政策的な介入なく循環利用される静脈資源もある。他方、個別リサイクル法のような人為的介入を経てはじめて循環利用される使用済み家電製品のような静脈資源もある。

ところで、日本で発生する静脈資源が今大量に海外に流出している。直近では廃鉛バッテリーの1/3近くが韓国に輸出されているし、廃アルミ缶の輸出の伸びもここ数年著しい。廃基板類も大量に海外に流出していると見られている。注目すべきことは、これらの静脈資源がグッズとして輸出されているという点であり、このことに大きな懸念が出始めている。

市場経済でグッズとして取引されているのだから何ら心配をする必要はないではないか、という考えもあり得る。初級のミクロ経済学のテキストが教える通り、市場取引に従ったグッズの取引は、人々の経済厚生を最大化すると考えられるからである。だが、筆者には異論がある。

静脈資源がグッズだとしても、潜在汚染性が大きな場合、無制約な市場取引は結果として汚染を拡散させる恐れがある。廃バッテリーや廃基板を適正に循環利用するためには、然るべき制度と技術が必要であり、どこにでも輸出して良いというものではない。また、静脈資源のなかには、金・銀等の貴金属、プラチナ・パラジウム等の稀少金属を含んでいるものがある。これらの金属類は、日本の工業生産のための必須のものであり、その調達には戦略的発想が必要である。相場が地政学的な影響を受け易い金属は特にそうで、市場任せでよいというわけにはいかない。

日本はこれまでバッズをいかに減らすかということに腐心してきた。廃棄物処理費用が上昇し、最終処分場が逼迫する状況では当然のことである。制度的枠組を作ることによって、日本は3Rを押し進め、バッズの発生・排出抑制という面では成功した。だが、今最も重点を置いて考えるべきことは、静脈資源をいかに国内で確保し、再生資源として循環利用するということではないだろうか。天然資源の供給量がピークを迎えつつある今日、バッズを減らすこともさることながら、静脈資源を徹底的に利用し尽くす努力と制度的対応が求められているのだ。